

図書館の徹底活用術：学習支援の為の図書館の取り組み

(ジョン・デューイの『学校と社会』を手がかりに)

枝元 益祐

新入生の皆さん、ご入学おめでとう御座います。そして在学生の皆さん益々のご活躍を期待します。さて、今回より数度に渡り皆さんの学習支援の為の図書館の有効な活用方策をご紹介させていただきます。識っていると非常に有利且つ強力な頼れる存在の図書館の活用の仕方、或いは、意外と識られてはいない活用方策などを紹介することで皆さんの学習支援の一端を担いたいと思います。

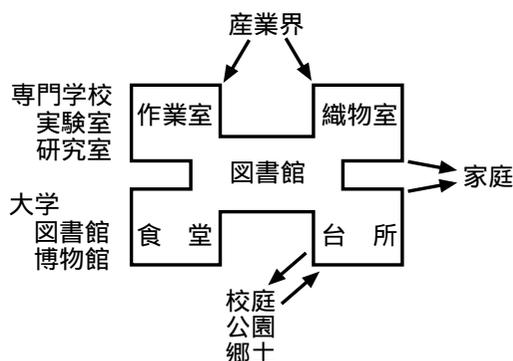
さて、そもそも学校に於ける図書館とはどのようなものでしょうか。新入生の皆さんにとっては、初等中等教育(小学校・中学校・高等学校など)施設に設置された図書室(学校図書館)を連想すると思われます。大学の在学生にとっては大学付属図書館(大学図書館)が相当します。皆さん達にとって、それらはどのような場所でしょうか。書籍が沢山置いてある場所、勉強のための場所、読書をする場所、友人と談話する場所、何となく立ち寄ってみる場所、何となく寄りつかない場所・・・など色々な捉え方があると思います。

学校教育に於ける物理的な設置施設としての規定は、学校教育法施行規則第一条に明記され、「学校には、その学校の目的を実現するために必要な・・・(中略)・・・図書館又は図書室」などの設備を設けなければならないとなっています。そして、その活動内容として、学校図書館法や学校図書館基準に於いて、「学校教育に欠くことのできない」ものであり、「教育課程の展開に寄与」とすると同時に、「学校教育の目的と一致する」と位置付けられています。ということは、学校の授業で使用する教材は当然、課題やレポートの材料も総て図書館で整備され皆さんが利用してくれるのを待っているということです。

そして、ジョン・デューイはその著書『学校と社会』に於いて、学校組織はその地域社会の縮図的要件を構造的に内包しているとの認識に立脚し、地域社会に於ける日常生活での経験を拡大することが学校教育の役割だと主張すると同時に、日常生活から切り離された教育活動を批判しました。そういった日常生活の活動拠点として中心的存在が図書館なのです。ジョン・デューイは子ども自身の経験が好奇心を喚起し、独創力を高め、強力な願望やその目的を創出し能動的成長を促進するとして経験の持つ重要性を強調しています。特に『学校と社会』に於いて示された「子どものもつ4つの興味(コミュニケーションへの興味、物事を発見する興味、構成する興味、芸術的表現の興味)」は生得的なものであるから、それらを欠いた学習は受動的態度の源泉であると主張すると同時に批判の対象としています。

ここまでで判ることは、右図のように図書館とは唯単にそこに存在するのではなく、学習生活、牽いては日常生活の活動拠点としての中心的存在であるということです。その為に図書館ではレファレンス・サービスをはじめ各種イベントが用意され、学習支援の為の活動が提供されています。まずは「図書館利用ガイダンス」に参加してみてください。きっと皆さんの図書館の観方が変わると思われます。

今回は初回ということもあり抽象的な事柄が中心でしたが、次回以降は具体的な図書館活用方策と学習支援について触れていく予定です。



(J.デューイ『学校と社会』宮原誠一訳
岩波書店、1957年、83ページ)

えだもと ますひろ(講師・図書館学・教育学)

1 J. デューイ著、宮原誠一訳『学校と社会』岩波書店、1957年

2 前掲(J.デューイ:1957年 p.56)